

近代の中国山地西部における水田開発と環境利用変化

—広島県山県郡上殿村を中心として—

赤石直美

- I. はじめに
- II. 研究対象地域の概観
- III. 上殿村における水田開発
 - (1) 水田面積の変化
 - (2) 上殿村における稲作の作業暦
 - (3) 自作地・小作地面積の動向
- IV. 上殿村における環境利用の変化
 - (1) 麻栽培の衰退
 - (2) 林業の動向
- V. 山林資源利用と森林環境
- VI. おわりに

I. はじめに

水田景観は、自然環境の影響を受けつつ土地に働きかけてきた人々の努力の結果として形成されたものと考えられる¹⁾。そのため、自然環境と人間との関係の歴史を如実に示したものとして水田景観を捉えることが可能であろう。特に棚田のような山間地域にみられる傾斜地の水田は、長期的な労働の積み重ねによって造成されたものであり²⁾、近年では歴史的・文化的遺産としても注目されている。

山間地域の水田のうち棚田研究の流れをみると、まず、水田立地の自然条件と山地農業との関係性を述べてきた小出 博によって、地すべり地と棚田との関連が指摘された³⁾。これを受けて竹内常行および中島峰広は日本

の主要な棚田地域の水利に注目し、これまで天水田と思われていた棚田も、実際には灌漑施設を備えたものであることを明らかにした⁴⁾。これらの研究によって、地すべり地であることだけが棚田の立地条件ではない事実が示されたのである⁵⁾。

さらに、人文・社会条件と棚田開発との関係を論じたのが、五十嵐 勉、亀岡岳志であった。五十嵐は、近世における棚田開発と土地所有との関係を明らかにした⁶⁾。近代について亀岡も、棚田開発における地域住民の自然認識と開発技術を詳細に述べつつ、土地所有の問題や経済的状況を開発の背景として指摘した⁷⁾。こうした研究の蓄積によって、自然条件への対応と歴史的な人文・社会状況との相互作用により、棚田は開発されてきたことが明らかになった。

一般的に、地域の特性は、自然条件と過去からの様々な事情が蓄積された人間社会の状況との相互作用によって形成されるものである。山間地域の棚田をはじめとする水田も地域の特性が反映していると指摘できよう。その点で、豊後水道沿岸地域における階段状の畑地開発に着目した千葉徳爾⁸⁾や、琵琶湖沿岸の内湖干拓事業を取り上げた佐野静代も同様の立場で研究を行なっている⁹⁾。本稿も山間地域における水田・棚田の開発について、自然環境への対応を踏まえたうえで、地域固有の歴史的背景に注目したい。

ところで、山間地域の歴史的特性として、林業をはじめ狩猟や採取といった山林資源を巧みに利用した環境利用が挙げられる。水田稲作に特化されない、自然環境を利用した生業が、山間地域における独自の文化として強調されてきたのである¹⁰⁾。したがって、多様な環境利用の動向は、山間地域における水田開発以前の歴史的特性として重要である。

しかし、これまでの研究では、地域の歴史的背景として一般的な土地所有の問題が重視され、稲作以前の状況や稲作以外の生業の動向はあまり重要視されてこなかった。そのため、稲作化される以前における環境利用の実態といった、山間地域固有の歴史的特性までは十分に明らかにされたとはいえない。

そこで本稿では、山間地域における棚田のような傾斜地の水田開発と、この開発以前の環境利用との関係を検討する。具体的には、農山村における地域社会が大きく変化した、明治期以降から昭和初期に着目する¹¹⁾。そして、対象期間における水田開発過程と稲作以外の環境利用の変化を明らかにし、当該地域における水田開発の意味を検討したい。

研究対象地域として、本稿では棚田が卓越する広島県山県郡戸河内町上殿（現安芸太田町上殿）を取り上げる。近現代の日本の水田開発について論じた元木 靖によれば、戦前では広島県や島根県、山口県などの中国地方が、傾斜地に水田が広く分布する地域として示されている¹²⁾。しかし、中国山地の棚田や傾斜地水田の開発に着目し、さらに稲作以外の生業との関係を積極的に議論した地理学的研究は多いとはいえない¹³⁾。そこで、水田開発と地域の生業との関係を捉えることは、中国山地における水田開発を把握するうえでも意義があろう。

広島県の北西部に位置する山県郡周辺には石積みの棚田が多く存在する。これら山間地域の棚田では開発時期の不明な場合が多いものの、上殿の水田は昭和初期に畑から転換さ

れたことが判明している数少ない例である¹⁴⁾。したがって、この面からも研究対象地域として適切な要件を備えていると考えられる。

II. 研究対象地域の概観

上殿集落は、1950（昭和25）年に戸河内町に合併されるまで、箕角・中央・長田の3つの大字からなるひとつの行政村であった。明治期が主たる研究対象期間であるため、本稿では対象地域を上殿村と称することとする。図1をみると、1899年頃の上殿村の集落のほとんどは、標高200m付近のゆるやかな斜面に立地し、水田は太田川左岸に立地していることがわかる。その集落と耕地の北側には山林が広がっている。当村の人口は、明治期～昭和初期にかけて1,400人前後で維持されていた¹⁵⁾。1935年の『山県郡上殿村経済更生計画書』によると、当村の戸数は265戸、人口は1,470人であった¹⁶⁾。

近世末期の地誌書類である『芸藩通志』によれば、上殿河内村（上殿村）は「初め戸河内村より分る（中略）本郷形態は、東北田あり、南に川あり、西北は高山相連る」と記述されている。隣接する戸河内村（現安芸太田町）は、「戸河内村 以下十二村を、大田庄と称す。（中略）居民農余山業紙抄あり、又タタラ場近き所は、鉄を駄送す、村中市聚あ

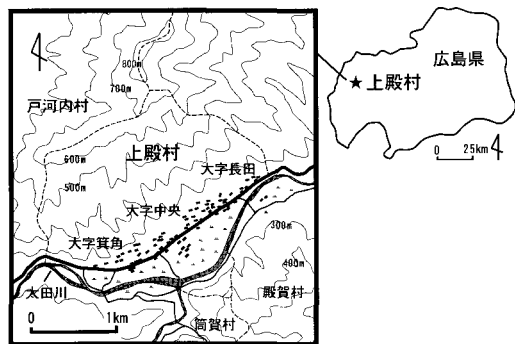


図1 上殿村地域概観図

(明治32年測図同35年製版5万分の1地形図より作成)

り]となっている。また、加計村（現安芸太田町）については「民農餘に、紙抄、山業、又割鐵二場あり、村中市聚をなす、此村も寛政八年、水害蒙り、漸くその舊に復りけれど、水路變ぜりと云ふ」とある¹⁷⁾。このように、近世末期の上殿村周辺では、農業やその余業として山仕事やたたら製鉄関係の仕事が行なわれていた。1878年の『徴発物件一覧表』における山県郡の物産には、「米・麦・雑穀・猪・鹿・香茸・木材・薪・炭・鮎」が記されており、山林資源を利用した生業が営まれていた¹⁸⁾。

さらに、明治末期における農家の年間作業内容をまとめたものが表1である¹⁹⁾。ただし、資料には2・3・6月の内容が欠けている。例えば5月の作業内容をみると、水稻の場合では、苗代の管理、本田の水路整理、施肥が行なわれていた。麦では黒穂の板取、各種蔬菜の種まき・中耕・除草、施肥、採取が主な作業であった。果樹では、害虫の駆除があげられていた。「その他」には、蚕・家畜、林業ではワラビ・ゼンマイの採取と、柴木採取ならびに間伐などがあつた。稲の収穫時期である10月には、麦や粟・稗・黍、各種蔬菜に関わる作業に加え、竹林の管理、桑園の管理、果樹の剪定、松茸や椎茸の採取が行なわれていた。他の月においても、田畑での耕作に加え、果樹、養蚕、林業や薪炭材採取・製造といった作業がみられた。このように、明治から大正の山県郡では、農業に加え、用材の手入れや山菜採取といった山林資源の利用が行なわれていた²⁰⁾。

そして、聞き取り調査によると、第2次世界大戦前後頃の上殿村では、稲・麦・麻の栽培や製炭業が行なわれ、その傍ら石工・大工・木出し・樵などの諸職に就く者が多くいたという。

このように、農業をはじめ山林資源を主とした環境利用が上殿村周辺では展開されていた。この点をふまえ、上殿村における水田開

発と、明治末期から昭和初期までの環境利用との関係を次章以降では検討したい。

Ⅲ. 上殿村における水田開発

(1) 水田面積の変化

現在の上殿における耕地のほとんどは水田である。これらの水田は、ゆるやかな斜面に階段状に広がっており、その畦は石積みであることが特徴である。石積みである利点は、田一枚当りの面積を広くできること、畦草を刈る手間を省けることにある。欠点は、畦での大豆栽培ができないことや、畦草を飼料にできないことであるという²¹⁾。

さて、上殿村には、明治初期まで飛地や枝村が多く点在していたが、それは1882年の行政区画の整理によって解消された²²⁾。当村の領域が定まって以降（具体的には明治末期から）、昭和初期までの田畑面積の変化をみたい。表2より、まず1907年の田は472反、畑は432反で、田畑の面積はほぼ均衡していた。それが、1925年では田527反、畑373反と、田の面積が増加し、畑が減少した。1935年になると、この傾向がさらに顕著になり、総耕地面積のうち田の面積が80%を占めるようになった。

このように、田の面積は徐々に増加していった。しかし、この約30年間における当村の田畑合計の面積は、900反前後で推移している。したがって、新たな開田が行なわれたのではなく、当村は畑を田へと転換した結果、水田稲作中心の集落になったといえる。その転換は大正末期より進み、上述のように1935年頃には田の面積が畑の面積を大きく上回った。とくに、1935年における田の面積の急激な増加は、1931年から始まった「上水路」と呼ばれる用水路設置工事と、水田開墾工事によるところが大きい²³⁾。もともと太田川からの引水は、河川近くの低地に位置する水田のみで実施されていた。そのため、集落周辺のゆるやかな斜面の水田・畑は水源に

表 1 明治末期の山県郡における年間労働

月	水 稻	陸 稻	麦	雑 穀	蔬 菜	特殊作物	果 樹	家 畜	林業・副産物	その他
4	苗代の準備・管理、本田の耕起		中耕、除草、谷上げ		種まき、施肥、移植、間引、中耕、収穫	牧草、桑、茶、花卉、蘭田	剪枝、接木、挿木、害虫駆除	衛生注意	山林用苗木移植、本植、折傷伏手入、椎茸ワラビ・ゼンマイ採取	養蚕、鶏卵、稲作、用堆肥の製造、大豆粕粕干鰯の細粉
5	苗代の管理、本田の排水工事、水路浚渫、施肥	整地、元肥、播種	黒穂の板取		下種、移植、中耕、除草、間引き、採取	牧草、蘭草、茶、桑、厩の補地間引、害虫駆除	袋掛、接木、新芽の支柱立て、除草、害虫駆除	馬の交尾適期	ワラビ・ゼンマイの残物採取、藤除、其他障害木の却、柴木採取、間伐等	養蚕
7	除草、灌排水注意	中耕、除草、時々灌水、害虫駆除、施肥	麦扱、乾燥、調整	麻収穫、稗間引、中耕	下種、移植、中耕、除草、害虫駆除、採取	牧草、桑、蘭草、茶、大麻、杉苗除草、草山林下苧	採取、害虫駆除	放牧、種付、堆肥の積込及積返し、柴草採取		養蚕
8	除草、灌排水の注意	時々灌水、除草、中耕		間引、中耕	下種、移植、施肥、中耕、除草、採取	牧草、藁麥	採取、害虫予防、剪定、除枝除芽、施肥	牛の種付、朝夕の運動		養蚕、堆肥製造、柴草刈取、蘭草採別、扱苧製造
9	水落とし				下種、間引き、施肥、採取	牧草、菊、茶	採取、芽接、害虫駆除	濃厚飼料供給		養蚕、堆肥製造、柴草刈取、扱苧捻苧の製造、籬の解卵、焼土準備
10	収穫、乾燥	収穫、乾燥	整地、元肥、黒穂予防	粟稗黍の収穫	播種、移植、中耕、間引、施肥、草採取	竹林管理、桑、茶	剪定、採取		杉扁柏の種子採取及水撰、椎茸木切倒し、松茸秋椎茸其他の菌筆類採取	紙畳表製造、績苧堆肥の製造、勝栗乾柿製造
11	稲籾落とし、調整、籾摺、四斗俵装		中耕、除草、施肥、覆土		播種、中耕、施肥、移植、採取、土寄せ	霜被ひ、蘭草、桑の移植又は本植	落葉果樹の移植又は本植、害虫駆除、剪定		杉扁柏椿三桎櫟等の移植又は本植、各種用材薪炭材採取	堆肥の製造、水田耕起、道路・溝渠の改築修繕、排水工事、耕地整理
12			中耕、除草、施肥		霜被い、採取、貯蔵	桑園植付、害虫駆除	害虫駆除			堆肥、薪炭類の製造、蠶種貯蔵、収穫物の片付け、水田の耕起、耕地整理
1								適宜運動		養蚕関係、薪炭、藁細工、紙、畳表、績苧、農具の修理、堆肥製造

(山県郡報) 1912より作成)

表2 上殿村における田畑面積の変化

(単位：反)			
年	田	畑	合計
1907 (明治40)	472	432	904
1912 (大正元)	503	408	911
1920 (大正9)	518	405	923
1925 (大正14)	527	373	900
1930 (昭和5)	576	327	903
1935 (昭和10)	736	165	901

(『上殿村現勢調査簿』より作成)

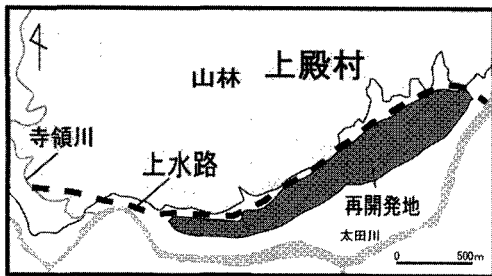


図2 上殿村における1931年の水田開発
(上殿村資料の工事概略図より作成)

恵まれていなかった。そこに「上水路」が設置され、用水が確保されたのである。この事業は、当時の村長である山根 薫が主体となって行なわれた。まず、1931年に「上水路」の工事が始められた。図2に示したように、全長6,241mの「上水路」は旧戸河内町から流れる寺領川を水源として山裾に通された。完成後の1932年から、畑の底を赤土でつき固め水漏れを防ぐ、水田への転換工事が始められたのである。この工事により畑から転換された水田は、合わせて約200反であった。

(2) 上殿村における稲作の作業暦

次に、水田面積が拡大されて以降の、上殿村における稲作技術を見ていきたい。「上水路」は、水番によって管理されていた。水番は年輩者の中から一人だけ選ばれ、集落ごとに時間帯を決めて水路の栓を開けてまわつ

月	作業内容
1	(農具の修繕)
2	(農具の修繕)
3	苗代準備
4	タオコシ ナカツクリ
5	シロカキ カキナカツクリ
6	タウエ
7	ナツクサカリ
8	(シバクサカリ)
9	(シバクサカリ)
10	イネカリ
11	イネコギ
12	(農具の修繕)

— 水田での作業期間

図3 1950(昭和25)年頃の上殿村における稲作労働暦

(聞き取り調査より作成)

た。上殿村では、水番による水利管理に加え、水田の水もちをよくするための耕作技術など、自然条件を反映した稲作が行なわれていた。

高度経済成長期以前の上殿村におけるある農家の稲作作業をみていきたい(図3)。当村では、3月下旬から苗代作りがはじめられ、同時に笹刈が行なわれ、刈られた笹は水田の肥料となった。5月に田起しがはじまり、アラオコシ→アラジ→ナカツクリ→シロカキ→カキナカツクリ→シロカキの順に作業された。カキナカツクリを行なうと、水田の水持ちがよくなったという。6月はタウエの時期で、それは下旬までに済まされた。タウエは隣近所で助け合い、共同で行なわれた。当村の水田は「古田フルダ」と呼ばれ、真砂土の多い浅くて硬い土からなるため、杖で穴をあけて稲が植えられた。このように乾燥した土であったため、人々は田起しの回数を多く

したという。夏季における水田での主要な作業は、草刈であった。田の除草では、草刈機が利用され、縦方向横方向にそれぞれ3回ずつ行なわれたという。7月下旬には夏の柴草が刈られ、柴草は牛の敷藁にし、堆肥や干草にして飼料など様々に利用された。稲刈りは10月中に行なわれ、刈り取られた稲はハゼに干された。そして、11月20日の戎講までにイネコギが済まされた。当村では、村祭りの日程を目安として、一連の水田にかかわる農作業を終了させていた。この作業暦は一般的なようであるものの、田起しに手間をかけ水持ちをよくする試みは、水源の豊富でない条件に対する努力といえる。

(3) 自作地・小作地面積の動向

上殿村において畑の水田への転換が土地所有にどのような影響を与えたかを、自作地・小作地面積の変化から検討したい。

表3によると、明治末期の上殿村では、自作地が257反に対して小作地が650反であり、小作地が広がった。それが、1920年では、自作地535反、小作地388反となった。ところが、昭和初期に再び小作地面積が広がった。そして、田への転換工事が完了した後の1935年では自作地404反、小作地497反となり、小作地が若干広い状態となった。

田畑別に自作地・小作地面積をみていくと、1907年における田の自作地は125反、小作地は347反あった。そして、1920年では、

自作地232反、小作地286反となったものの、1930年には再び小作地面積が広がっていた。そして、1935年の水田工事以降に、田の自作地面積は最も広がった。一方、畑も1907年では自作地132反、小作地303反で、小作地面積が広がった。大正期には自作地が広がるが、昭和初期には両者はおよそ同じ面積になった。このように、上殿村では田の面積の増加に伴い、自作地面積が増加していたのであった。

IV. 上殿村における農林業の変化

(1) 麻栽培の衰退

II章で述べたように、水田に特化する以前の上殿村では、田と畑の面積がほぼ等しかった。『広島県史』によれば、広島県における米以外の主な農産物は麦、薯、特用作物であり、特用作物として挙げられているのは、綿、藍、大麻、蒟蒻玉や煙草であった。1890年頃の上殿村を含む山県郡においても、米に次ぐ農産物は特用作物であり、具体的には大麻、楮、茶となっていた。そのなかでも大麻が、山県郡における主要な作物となっていた²⁴⁾。

さらに、「芸備日日新聞」(1886(明治19)年12月1日付)に次のような記事がみられた²⁵⁾。

「山県郡大田筋にてハ麻苧の製造方を改良し水製²⁶⁾となしたりしが今回該麻苧改良世話掛り広島区井東幸七岩崎永助両氏の代理人

表3 上殿村における自作地・小作地面積の変化

(単位：反)

年	自作地			小作地		
	田	畑	合計	田	畑	合計
1907 (明治40)	125	132	257	347	303	650
1912 (大正元)	160	135	295	343	273	616
1920 (大正9)	232	303	535	286	102	388
1925 (大正14)	240	275	515	287	98	385
1930 (昭和5)	167	168	335	409	159	568
1935 (昭和10)	321	83	404	415	82	497

(『上殿村現勢調査簿』より作成)

川村糸八氏出張せられ改良製の率先者山県郡上殿村野沢富三郎氏を製麻審査委員となし新製の麻苧を買上げたりしが其値段従来の製品より高価なりしかば大に人民の感覺を起し自今ハ悉く水製にするの趣きありと云う。」

これは、明治初期に麻苧の栽培方法が改良されたことで、麻価格が上昇したことを記した記事である。上殿村の住人である野沢富三郎が改良麻の率先者であったことから、耕地が水田に特化される以前、上殿村では麻栽培が行なわれていたことがわかる。

明治末期から昭和初期までの上殿村における麻の作付面積の変化をみると(図4)、1907年から1911年までの作付面積は420～430反であった。明治末期における上殿村の畑の面積は約430反であったので、ほとんどの畑で麻が栽培されていたといえる。しかし、大正期に入ると作付面積は低下し、200～350反ほどになった。そして、昭和初期の作付面積は150反となり、明治末期の3分の1にまで減少した。この変化は、畑面積の減少に対応している。

ただし収穫高は、1907年では8,600貫であったものの、大正初期～中期には12,000～17,000貫前後と増加していた。この反当り収穫高の増加は、良好な麻が収穫できたこと

と、第1次世界大戦期の好景気によるとされる²⁷⁾。しかし、大正末期には収穫高も下降に転じ、1931年では3,850貫と明治末期の半分以下にまで落ちこんだ。

栽培農法の改良に取り組み、積極的に行なわれてきた麻生産であったが、国内の他地域の麻に比べると質が劣っていたことやマニラ産麻の輸入によって、上殿村における麻栽培は衰退したとされる²⁸⁾。また、麻栽培は稲作と比べ手間がかかるうえ、価格が安かったことなども挙げられている²⁹⁾。

以上から、水田が特化される以前の上殿村では麻が生産されていたものの、需要の低迷に伴って畑が水田へと転換されたと判断される。

(2) 林業の動向

上殿村に隣接する戸河内町は、明治中期に林業の好景気によって町が賑わっていた³⁰⁾。聞き取り調査によれば、第二次世界大戦前後の上殿村では、農業の傍ら木出し・樵などの諸職が、用材や林産物の生産に関わっていたという。

耕地が水田に特化される以前の、明治末期から昭和初期にかけての上殿村における林産物の生産価格は、図5のように示される。1907年で419円であった生産額は、1923年に

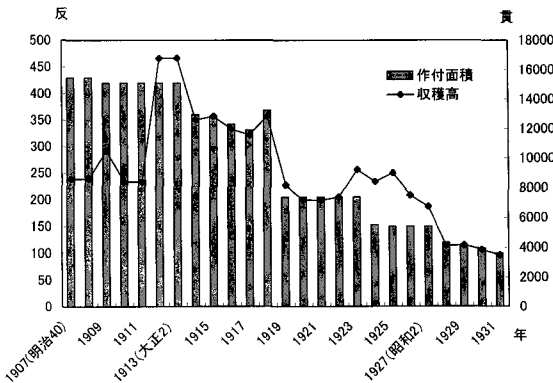


図4 上殿村における麻の作付面積と収穫高の推移
〔「上殿村現勢調査簿」より作成〕

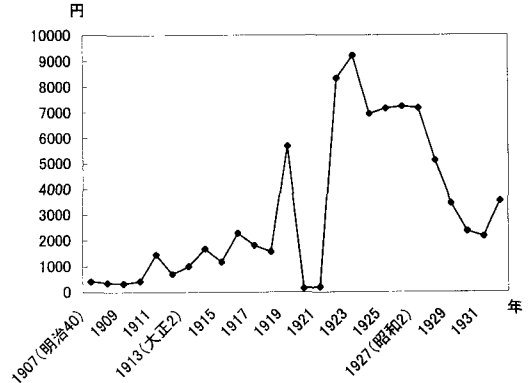


図5 上殿村における林産物生産額の推移
〔「上殿村現勢調査簿」より作成〕

※ 図6の用材・薪炭財の生産額、図7の丸・角材および鉄道枕木生産額を含む

は9,217円になった。ただし、明治末期から昭和初期にかけて生産額は増加しているものの、高収入期とそうではない時期とで格差があり、決して安定した収入を得ていたとはいえない。

上殿村の統計資料によれば、当村の主な林産物である用材は杉、松、竹であり、主に私有林で伐採されたものであった³¹⁾。また1907年から1918年にかけての林産物として、丸及角材、鉄道枕木、下駄材、竹材、杉皮、竹皮、樹実、木炭、マツタケがみられた。さらに、1919年から1932年にかけては、丸及角材、挽材、鉄道枕木、柴草、藤蔓、木炭（黒炭）、マツタケなどの生産がみられた³²⁾。

そこで、先の林産物生産額のうち、用材・薪炭材の生産額の推移を取り上げてみれば（図6）、明治末期から昭和初期にかけての生産は安定していなかった。この期間における用材の生産額は、1916年と1922年、1924年が高い³³⁾。しかし、その前後の時期における生産額の変動は大きかった。例えば、1923年の材積は明治末期の約20倍の4,906石で、生産額は約13倍であった。この推移からも、当村における林業生産額の変動は激しかったことがわかる。一方、薪炭材は、1923年から1926年間は、薪炭材の生産額が記載されていなかったものの、昭和期以降の生産額は安定していた。

さらに、林産物生産額のうち生産額の大きかった丸材角材、鉄道枕木の明治末期から昭和初期にかけての生産動向をみると（図7）、やはり生産額は安定していなかった。丸・角材の生産は、1923年から1929年の間のみ集中してみられた。また、鉄道枕木の生産も、1917・1918年、1922・1923年だけであった。このように、上殿村の林業は、木炭を除けば決して持続的なものではなかったといえる。

水田に特化される以前、上殿村の人々は麻生産の一方で林業に従事していた。しかし、林野利用による収入は不安定であった。麻栽

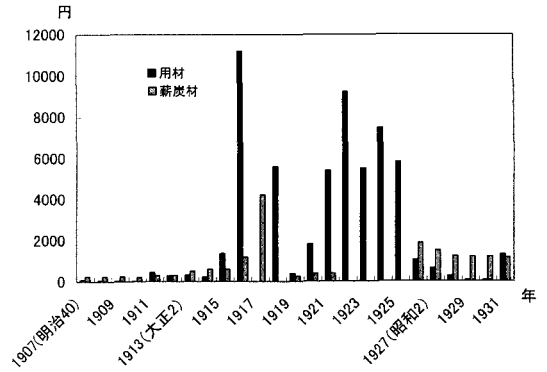


図6 上殿村における用材・薪炭材の生産額の推移
（『上殿村現勢調査簿』より作成）

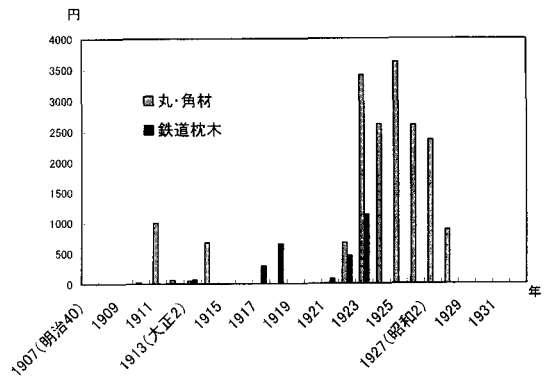


図7 上殿村における丸・角材および鉄道枕木生産額の推移
（『上殿村現勢調査簿』より作成）

培の衰退と林業不振のなかで、上殿村の土地利用は水田へ特化したのであった。

V. 山林資源利用と森林環境

上殿村では、農業の傍ら用材や木炭の生産なども行なわれていた。農業から林業まで多様な環境利用は山間地域の特性であった。このような営みの背景には、上殿村周辺をはじめ山間地域の自然環境が影響していたと考えられる。ところで、上殿村をはじめ周辺地域の山林の様子を記した記録である「山県郡林業踏査記」³⁴⁾に、次のような記事がある。

「本村は以前他人の山林に於ても自由に薪

材及肥草を採取し得る習慣ありて為に一時全山殆んど裸禿荒廢を極めたりしも明治十三年の頃入会権停止の爲漸次今日の林相をなすに至りたるものなりと現に二三年生の赤マツ林各所に散在するを見れば想像に難からざるへし、然れども将来濫伐するに於ては再び荒廢の虜あるを以て公私有林を問わず合理的の施業を為さしめたまきものなり。植林事業の見るへきものなきも堀内某の杉、ヒノキ扁柏林多少地方の木鐸たるへきか。」

これによると、上殿村の林野は明治期に荒廢していたが、この調査が行なわれた1920年頃には、上殿村の山林はアカマツ林つまり二次林へと遷移していたことがわかる。千葉徳爾によると、アカマツ林の生育は荒廢からの回復段階を意味するとされ³⁵⁾、上殿村ではマツタケが継続的に産出されていたことから、これが裏づけられる³⁶⁾。

それから約15年後の、1935年の上殿村のマツ林は1,608反、スギ林約67反、ヒノキ林約67反、矮林1014反、未立木地約374反、伐採跡地315反となっていた³⁷⁾。昭和初期における林野の植生ではマツ林面積が広く、また丈の低い林木や伐採跡地も目立っていた。したがって、明治期に荒廢し、一時には禿山化していた林野が大正から昭和初期に回復傾向にあったと推察される。

そもそも、広島県では近世の林野は、特に城下町付近及び海岸地帯において荒廢し禿山化していたという³⁸⁾。山間部でも、鉄山経営のために森林の伐採がしばしば行なわれたとみられる。また、明治維新以降の交通機関の発達、工業の勃興によって、ますます森林は乱伐され、随所で禿裸地が見られるようになった。そのため、広島県とその周辺は明治期に林野の荒廢がみられた地域であったとされる³⁹⁾。そこで、広島県では1878年に森林保護規則の県令が發布された⁴⁰⁾。さらに、公有林の荒廢が激しかったこともあり、1901年には公有林植樹奨励金下附規則が發布さ

れ、奨励金による造林が行なわれるようになった⁴¹⁾。

1937年頃の広島県では、6,867町の禿裸林地と林相不良で荒廢林地に移行しつつあった林野5,260町とで、合計12,127町の全国で最も広大な荒廢林地があった⁴²⁾。荒廢林地では降雨毎に災害が発生し、水源の枯渇がみられた。河川上流の荒廢林地の整備を軽視したため、災害が発生したと考えられ、広島県は上流の荒廢林地復旧事業に取り組んだ。そして、山県郡、ならびに太田川流域の約131町の荒廢林地が復旧事業の対象とされた⁴³⁾。

これらの状況から、以下のことが判明する。明治初期の上殿村の林野は荒廢していた。それに対し、禿山からの回復のため植林された木々は、大正前期に伐採され用材や薪炭材となった。ただし、1920年頃では植林作業がうまく進んでいなかったにもかかわらず、図6、図7からわかるように、上殿村では大正末期から昭和初期にかけて用材が盛んに生産された。このような植林された樹木の過度な伐採が、後年の木材生産に影響したと考えられる。その状況は、1935年のマツ林面積や未立木地面積をはじめとする記録からもうかがえる。林業で持続的な収入が得られなかったことは、上殿村の森林が禿山化、荒廢化していたことが要因の一つであった。

さらに、林野が荒廢した理由として、林野の入会的利用形態がかかっていると考えられる。明治中期には緑肥のための柴草の採取が盛んとなったが、この時期は麻栽培が改良された時期と一致しているのである。麻栽培に必要な柴草が過剰に採取された結果、上殿村の林野は荒廢したといえよう。

自然条件への適合性だけでは説明できない上殿村の水田化には、麻生産の衰退と林業の不振、その背景にあった林野の荒廢とが関係していたと考えられる。

VI. おわりに

本稿は、近代の山間地域における水田開発について、棚田の卓越する広島県山県郡上殿村を例とし、水田開発以前の農林業を中心とする環境利用との関係から検討した。

上殿村では1931年から行なわれた「上水路」の設置工事により、畑が水田に転換され、この転換は自作地の増加をもたらした。それは、用水不足という自然環境を克服するための一手段であった。水田が増加する以前の上殿村では、農業と林業との複合経営を中心に、石工や木出しといった諸職に従事するなど多様な生業が行なわれていた。なかでも、稲作に転換されるまでの主要な農産物は麻であった。麻の生産動向をみると、明治末期から大正中期にかけて盛んに生産されていた。しかし、麻の需要が低下し、生産が下降に向かったことで、その後は水田稲作に特化した。

一方、大正期には、丸・角材や鉄道枕木の生産高が伸びており、林業が盛んになった。林業も、水田稲作化以前の上殿村における生業の一つであった。しかし、用材の生産は持続しておらず、不安定なものであった。

この林業不振の背景には、林野の荒廃が関わっていた。当村の林野は、明治期に一時禿山化し、植林が行なわれていた。大正期では、上殿村の山林にアカマツが多く、まだ森林は回復段階にあった。好景気に乗じてこの回復期の森林を人々が過剰に伐採した結果、山林資源は枯渇し、材木の生産は一時的なものとなってしまった。そして、この林野荒廃の要因の一つが、麻栽培による緑肥の採取であった。つまり、麻栽培→緑肥採取→林野荒廃→林業不振という悪循環が成り立っていたと考えられる。そのため、人々が収入の安定化を図った水田への転換は、この悪循環を改善することとなった。

昭和初期の不況や地域の土地所有問題は、

山間地域における水田開発の動機となりうるものであった⁴⁴⁾。本稿で対象とした地域においても、水田の増加によって自作地も増加していた。また、既存の成果でも指摘されてきたように、上殿村もまた、水利環境の整備を経て、水田稲作を生業の中心とする集落となっていた。これらの成果に加え本稿は、稲作以前からの地域固有の環境利用に着目し、中国山地の水田開発特性を取り上げた結果、麻栽培や林業の盛衰、さらに森林荒廃が進んでいたという広島県山間地域の地域的特性と水田開発との関係を見出した。ただし、地域住民が林野の環境改善を意図して、畑から水田への転換事業を行なったか否かは本稿では対象外としており、この点は今後の課題である。林野荒廃は、土砂災害を招く危険性がある⁴⁵⁾。結果的に水田への転換は、森林環境問題を解決するうえでも好都合であったといえる。居住者にその認識がなかったとしても、林野への負担が少ない稲作の選択は、未然に土砂災害を防いでいたと考えられる。かかる側面の実証研究も必要であると考えが、これらの問題は今後の課題としたい。

(立命館大学・院)

〔付記〕

本稿の執筆にあたり、広島県山県郡戸河内町(現：安芸太田町)の教育委員会町史編纂室をはじめ、戸河内町の皆様には多大なご協力を賜りました。また、立命館大学の吉越昭久先生、河原典史先生をはじめ立命館大学地理学教室の先生方にもご指導をいただきました。お礼申し上げます。なお、本稿は2001年度立命館大学大学院へ提出した修士論文の一部を修正したものであり、その内容は2004年度日本地理学会春季学術大会(於：東京経済大学)にて発表した。

〔注〕

- 1) 古島敏雄『土地に刻まれた歴史』、岩波新書、1967。

- 2) 前掲1), 138～143頁。
- 3) 小出 博『日本の国土 下』, 東京大学出版会, 1973。
- 4) ①竹内常行『稲作発展の基盤』, 古今書院, 1984。②中島峰広『日本の棚田』, 古今書院, 1999。
- 5) 前掲4) ①84～92頁。
- 6) 五十嵐勉「江戸山村における耕地開発と村落構造 — 越後国 城郡下平丸村 —」, 人文地理35-5, 1983, 51～69頁。
- 7) 亀岡岳志「地すべり地帯における明治中期以降の天水田開発 — 新潟県東 城郡松之山町松口集落の事例 —」, 人文地理49-5, 1997, 79～95頁。
- 8) 千葉徳爾「豊後水道沿岸における急斜階段耕地の成立」, 地理学評論33-9, 1960, 447～462頁。
- 9) 佐野静代「琵琶湖岸内湖周辺地域における伝統的環境利用システムとその崩壊」, 地理学評論76-1, 2003, 19～43頁。佐野は, 内湖干拓の要因を, 環境の変容にともなう地域住民の内湖に対する価値観の喪失であったとした。この見解は, 単に開発=耕地拡大とされてきた既存の成果に対し, 内湖利用の歴史的背景と関連つけて開発プロセスを述べたものである。
- 10) 松山利夫『山村の文化地理学的研究 — 日本における山村文化の生態と地域の構造 —』, 古今書院, 1986。
- 11) 暉峻衆三編『日本農業100年のあゆみ』, 有斐閣, 1996, 1～189頁。
- 12) 元木 靖『現代日本の水田開発 — 開発地理学的手法の展開 —』, 古今書院, 1997, 35～49頁, によると, 広島県の1942年で急傾斜地に田の分布する割合は, 約20%で全国5番目であった。
- 13) 例えば, 赤木祥彦「中国山地中央部における鉄穴地形の耕地化 — 広島県東城町と島根県横田町大谷本郷地区の場合 —」, 福岡教育大学紀要39-2, 1990, 1～10頁や, 徳安浩明「江戸・近代における中国山地の開発とタタラ製鉄 — 美作郡西々條上斉原村の事例 —」, 地理科学54-3, 1999, 33～40頁。同「鉄山経営者による耕地開発と集落形成 — 鳥取県日野郡江府町宮市原の事例 —」, 歴史地理学181, 1996, 2～18頁がある。
- 14) ①上殿村『山縣郡上殿村経済更生計画書』, 1935。②今田三哲『水路の水はこんこんと』, 1999, (非売品)。これは, 上殿地域の住民が開墾事業の内容をまとめられたものである。本稿の引用はこれら①・②の資料による。
- 15) 戸河内町編『戸河内町史 通史編(下)』, 戸河内町1993, 55・138頁。
- 16) 前掲14) ①。
- 17) 頼 杏坪等原本編, 加藤景譜編『芸藩通志』, 「芸藩通志」刊行会, 1967。
- 18) 『徴発物件一覧表』, 雄松堂マイクロフィルム出版, 1985。
- 19) 「山梨郡役所『山県郡報』, 28・29・31・32・34・37号, 山県郡役所, 1912」。
- 20) 戸河内町編『戸河内町史 民俗編』, 戸河内町, 1993。
- 21) 上殿に住む, 69歳(当時)の住人に対する聞き取り調査による。
- 22) 前掲14) ①。
- 23) 前掲14) ②。
- 24) 広島県編『広島県史 近代編I』, 広島県, 1980, 361～364頁。
- 25) 「芸備日日新聞」, 1886(明治19)年, 12月1日付。
- 26) 「改良された製法とは, 皮をはいだ麻をこぐ前に煮るか否かの違いであると推察される。従来上殿村周辺では, 大量の木灰と薪を消費して煮ていたが, それをやめたようである。この点を水製とさすと考える」。
- 27) 前掲15) 233～235頁。
- 28) 前掲15) 233～235頁。
- 29) 前掲14) ②28～29頁。
- 30) 前掲15) 83～87頁, 「1894年の戸河内町中心部には, 芸妓を抱えた料理屋が8軒ほど開店したという」。
- 31) 『上殿村現勢調査簿』, 上殿村, 1907～1932。
- 32) 前掲31)。
- 33) 「図6の値が図5の傾向と必ずしも一致していないものの, どちらも資料通りの値である。資料をみたところ, 図5の林産物額に用材の生産額が含まれていない年があった

ためのものである。統計上の不備と考えられるが、本稿は資料の記載を重視した。」

- 34) 前掲19), 35号, 1920。
- 35) 千葉徳爾『増補改訂 はげ山の研究』, そしえて, 1991, 72～82頁。
- 36) 前掲31) には, 上殿村におけるマツタケの生産額が記録されている。
- 37) 前掲14) ①。
- 38) 広島県治山治水協会『広島県治山史』, 広島県治山治水協会, 1949, 5頁。
- 39) 『勸業会山林部日誌 第1次』, 農商務省山林局, 1884, 29～35頁。岩本純一「明治・大正期における広島県の森林荒廃と復旧対

策』, 久守藤男教授退官記念出版会編『地域農林業の課題と方向』, 創成社, 1995, 118～136頁は, 広島県を荒廃が全国のなかでも大きかったと地域とし, 広島藩の森林保護対策を取り上げている。

- 40) 前掲38) 6頁。
- 41) 前掲38) 6頁。
- 42) 前掲38) 11頁。
- 43) 前掲38) 12頁。
- 44) 前掲6), 7)。
- 45) 藤田佳久『日本山村の変容と整備論』, 地人書房, 1998。